

御蔵島産ツゲ・クワ材の生産流通および加工販売の現状

Present states of distribution, processing, and sales of Japanese boxwood (*Buxus microphylla*) and Mulberry tree (*Morus bombycis*) harvested on Mikura-jima Island田中亘*¹Wataru TANAKA*¹

* 1 森林総合研究所

Forestry and Forest Products Research Institute., Tsukuba, Ibaraki 305-8687

要旨：東京都御蔵島で生産されるツゲおよびクワ材は、古くから希少な高級材として本州へ持ち込まれ、工芸品や指物の材料として利用されてきた。しかし、近年は生産量が減少傾向にある。本研究の目的は御蔵島におけるツゲ・クワ材の生産流通および加工販売の動向を明らかにすることである。近年、島内でのツゲの生産量は年間5～6トンと推計される。このうち3～4トンを御蔵島村が買い取り、村産業センターによる加工を経て島外へ販売している。残りの2トン程度は生産した個人が行政の介在を経ずに島外の業者へ販売している。ツゲの購入者は東京都内の銘木店や工芸品製作者が多いが、現時点で量的に最も多く購入しているのは山形県天童市の将棋駒製作店である。同店において近年急速にツゲ材需要が伸びた理由は、ふるさと納税の返礼品の一つとしてツゲを材料とした駒が取り上げられて人気が出たためである。一方、クワは生産量の減少が顕著であり、在庫からの販売が中心となっている。そのため、クワについては供給の不安定性から希少性がより高まる傾向が続くと予想される。

キーワード：ツゲ、クワ、御蔵島、工芸品

Abstract: Japanese boxwood (*Buxus microphylla*) and Mulberry tree (*Morus bombycis*) harvested on Mikura-jima Island, which are transported to the main island of Japan, are considered as rare, high-quality materials used for manufacturing craft products and cabinets. However, the volume of harvested trees has been declining in recent years. This study aimed to clarify the present states of distribution, processing, and sales of Japanese boxwood and Mulberry tree produced on Mikura-jima Island. The annual harvest of Japanese boxwood on this island is estimated to be 5–6 tons, of which 3–4 tons is purchased by the local government of Mikura-jima village and sold to manufacturers or traders on the main island after rough processing. The remaining 2 tons is sold directly by loggers to manufacturers on the main island. Tokyo has many buyers of Japanese boxwood, but a processor of shogi pieces in Tendo-city, Yamagata Prefecture is currently the largest consumer. This processor provides shogi pieces to “furusato nozei” (hometown tax) donors as a return gift. Because this gift is highly popular, the demand for Japanese boxwood by this processor has drastically increased. On the other hand, the annual harvest of Mulberry tree has remarkably declined, and the stock is insufficient to fulfil new orders. It is expected that the instability in the Mulberry tree supply will continue, making the tree rarer.

Keywords: Japanese boxwood, Mulberry tree, Mikura-jima Island, manufacturing craft products

I はじめに

古くからツゲ(*Buxus microphylla*)およびクワ(*Morus bombycis*)は工芸品や指物の材料として高い評価を受けながら用いられてきた。とりわけ御蔵島で生産される材は品質の良さから東京において高い評判を得てきた(1)。御蔵島で生育する樹木は恒常的に吹き付ける海からの風にさらされることから成長速度が遅くなり、年輪幅の狭

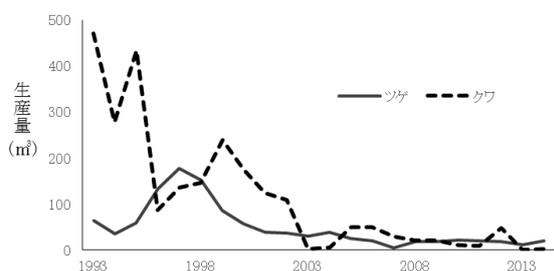
い緻密な材に仕上がることがその理由として挙げられる。

伊豆諸島の一部である御蔵島におけるツゲ材生産の歴史は古く、江戸時代後期から三宅島を通じて江戸へ販売され、その収入が農業に適した平地がない人口300人ほどの島の生活を長く支えてきた(6)。ツゲ材の販売が村の経済を支えていた状況は昭和三十年代頃まで続いたが、近年はイルカウォッチングに代表される観光業が主産業

といえる状況へと変化している(3)。

御蔵島におけるツゲ・クワ材の生産量は以前と比べると大きく減少している(図-1)。しかし、ツゲを用いる工芸品やクワを用いる指物の製作者にとって、依然として不可欠な材料であることに変わりはない。

1980年代における御蔵島内のツゲ材の流通加工実態については斉藤(1983)が紹介しているが、現在の流通加工の実態は不明である(5)。また、「御蔵島島史」や「三宅支庁管内概要」の資料からはツゲ材およびクワ材の生産量について把握することができるが、生産の実態を知ることはできない(6, 7)。



資料:「三宅支庁管内概要」各年版

図-1. 御蔵島におけるツゲ・クワ材の生産量の推移
Fig.1 Changes in production volume of Japanese boxwood and Mulberry tree harvested on Mikura-jima Island

II 研究の目的と方法

本研究の目的は御蔵島におけるツゲ・クワ材の生産流通および加工販売の近年の動向を関係者への聞き取り調査から明らかにすることである。生産と流通の実態については、東京都御蔵島村役場、御蔵島村産業センター(以下、産業センター)および伐採者A氏に対する2016年6月実施の聞き取り調査から明らかにする。加工と販売の実態については、産業センターから紹介を受けた山形県天童市内の将棋駒製作B商店、東京都江東区内の工房主宰C氏、および同区銘木小売D店に対する2016年7月および9月実施の聞き取り調査から明らかにする。

III 結果

1. 生産 ツゲの植林は島民の手によって江戸時代から既に始められていたといわれる(6)。ツゲ造林地の正確な面積は不明ながら、中村(1979)は70~100ha程度と推測している(4)。このうち現在島内でツゲ生産の中心となっているのが、島南西部黒崎地区の村有地で1920年代後半に植林された人工林である。同地のツゲは植林されてから約90年が経過しており、用材として十

分な直径(少なくとも10cm以上)にまで成長している。樹高は7~8mで成林しており、そのうち用材となるのは下から4m程度までである。太いものは伐採時に1本で100~150kgほどあるが、そのうち商品として利用できる部分は通常80kgほどである。

このツゲ人工林からの生産物については、植林を実行した20軒あまりの分収契約者(相続人)が伐採および販売する権利を有する。村役場は村民からツゲの原木を毎年1月から2月にかけて上限数量を決めて購入している。年度別の購入量は2012年度2.9トン、2013年度4.0トン、2014年度3.8トン、2015年度4.2トンであった。役場産業建設課によれば、例年20軒程度から原木を購入するが、そのうち自分で伐り出しているのは10軒程度であるという。その他の家は親類縁者、または後述のA氏に伐出を依頼している。

ツゲ材の購入価格は径級によって決められており、表-2のとおりである。ツゲ原木の村による購入量は1軒につき年間150kgまでと決められている。そのため、多くても1軒あたり年間10~15万円程度の収入にしかならず、多くの家計にとっては補助的収入という位置にとどまる。

表-1. 御蔵島村のツゲ材・クワ材の原木購入価格

Table.1 Price of logs of Japanese boxwood and Mulberry tree purchased by Mikura-jima village office

		末口直径	円/kg
ツゲ		20cm以上	1,000
		15cm以上20cm未満	800
		10cm以上15cm未満	400
		5cm以上10cm未満	200
		5cm未満	受け取り不可
		末口直径	長さ2mあたり (円)
クワ		50cm以上	約40,000
		40cm以上50cm未満	約30,000
		30cm以上40cm未満	約20,000
		20cm以上30cm未満 (木内部によって)	約3,000
		20cm前後	約2,000

資料:御蔵島村産業建設課

上述の通り、多くのツゲ生産者の収入は村の購入上限量に規定されているが、自分で伐採しながら独自の販売経路を有するA氏についてはその限りでない。A氏は自分で伐採販売する権利を持つ林地に加えて、他者からの依頼による伐採も毎年行っている。2015年度は総計約2.5トンを伐採、そのうち約0.4トンを村に販売、残りを自分で半割などの加工を済ませてから本州の業者へ販売した。A氏は良質と判断した立木を中心に伐採し、村の原木購入価格よりも高い1,200円/kgで伐採依頼者か

ら購入している。

一方、クワ材はまとまった人工林地がなく、その多くは天然木から生産されてきた。1990年代に生産量が多かったのは当時整備中であった林道建設時の支障木として伐採されたものが多かったためである。近年は生産量が少ないままに推移し、2013年1m³、2014年2m³と極小状態にある。

2. 加工

(1) 産業センター 御蔵島で生産されたツゲ・クワ材のほとんどは丸太のまま移出されるのではなく、移出前に島内で半割材や板材などへ加工される。村が購入した原木については産業センター内の加工所、A氏が伐採購入した原木についてはA氏の加工施設でそれぞれ加工されている。

ツゲ材の加工利用に関する大きな問題の一つが原木に「シミ」と呼ばれる青い汚れが入って商品価値が下がってしまうことである。伐採後の未乾燥の状態でも長く保存すると「シミ」が入りやすいため、保管する環境には注意が必要である。産業センターがその対策として真空乾燥釜設備を整備したところ、「シミ」の発生状況はかなり改善された。設備導入以前は欠点材の出現率が7割もあったものが、設備導入によって3割程度に収まるようになった。半割状態にした原木を乾燥設備に入れて、2週間がかりで含水率を65~70%から15%まで下げている。

産業センターは乾燥したツゲ材を在庫し、需要者の注文に応じて販売している。2015年度の販売実績および販売単価は表-2の通りである。

表-2. 2015年度におけるツゲ材の販売量および額

Table.2 Sales amount of Japanese boxwood in the 2015 fiscal year

	kg	円	円/kg
半割(並)10cm未満	307	245,600	800
半割(並)10~15cm未満	850	1,275,300	1,500
半割(並)15~20cm未満	107	181,220	1,700
半割(良)10cm未満	67	334,000	5,000
半割(シミ40%)	2,364	1,773,000	750
半割(トラ奎)	32	320,000	10,000
木端	158	118,440	750
櫛板(トラ奎)	144	144,000	1,000
ブロック(箸材用)	103	309,150	3,000
その他	15	97,410	-
計	4,147	4,798,120	

資料:御蔵島村産業建設課

半割加工した材が販売種別の9割を占める。中でも「シミ40%」材の割合が多く、全体の半数以上を占めている。これは、比較的low質のツゲ材が多く販売されたことを示しており、2015年度における際だった特徴といえる。販売先は後述のB商店である。

産業センターでは箸、キーホルダー、しおり、印鑑等の土産用品の加工も行っており、その自己消費は年間100kg程度である。加工した製品は主に島内の農協や土産物店等で販売している。

(2) B商店 加工者として調査時点で最も多く御蔵島からツゲ材を購入しているのは、山形県天童市で将棋駒を製作するB商店である。天童市は日本有数の将棋駒生産地と知られている。天童市の将棋駒生産の材料としては、近隣で生育するイタヤカエデやオノレカンバなどが以前からの主流である。しかし、B商店は需要量が落ちてきた1990年代以降、良質で評価の高い御蔵島産ツゲ材を用いた高級な駒セットを生産することで他との差別化を図る戦略を採るようになった。また、B商店は駒セットに加えて根付けなどのアクセサリ商品もツゲ材を利用して生産してきた。2014年の御蔵島産ツゲ材の購入量は400~500kg、うちアクセサリとしての使用量は100kg程度であった。

2015年度においては上記と大きく異なる状況が生じた。天童市に対するふるさと納税の返礼品の一つとしてツゲを材料とした駒ストラップが取り上げられて人気を博し、需要が急増したためである。駒ストラップの注文は天童市全体で15万件に達し、そのうち7万件はB商店に対する注文であった。その需要に応えるため、B商店は産業センターから2015年度に3.5トンのツゲ材を購入した。ストラップ作成時には塗色などの加工を施すため、B商店は比較的low質なシミ材も利用しながら対応している。2016年度もふるさと納税の返礼品としての注文が多い状況は継続しており、B商店は少しずつ落ち着きながらもこの需要が今後数年間継続するものと見込んでいる。

(3) C工房 工房主宰のC氏は1985年頃からクワ材を用いた将棋駒箱を代表品目として製作活動を続けてきた。御蔵島産のクワ材は年輪に加えて複雑な杓目が現れることが特徴であり、特にそれが顕著な根元部分を用いた作品はより高い評価を得てきた。

御蔵島でクワ材の生産が盛んだった1990年代はクワ材の駒箱に対する需要も旺盛であり、年間で100個ほどを製作していた。当時から10年ほど前までは、指物の材料としてクワを専門的に扱う卸売業者が東京に2、3社あり、そこで必要な材料は基本的に入手できる状況だった。一例を挙げると、2004年にはクワの根元部分の一まとまりを卸売業者から10万円で購入し、駒箱を10個製作する材料を取ることができていた。

しかし、それらの業者が廃業や業種転換してしまっ以降、近年は必要なクワ材を安定的に入手することが困

難な状況となっている。産業センターにあるクワ材の現在の在庫は根元部分を含んでいないため、需要の強い杢目の現れた駒箱製作が困難である。2016年に関しては、クワの板材2枚(13kg/枚, 2,000円/kg)を御蔵島の知人の伝手によって購入することができた。その板材は根元部分であり、駒箱9個分の杢目の現れた材料が取ることができた。貴重な材とはいえ、杢目の現れる部分のみを利用するため、この場合でも歩留まりは10~20%程度に止まる。今後、需要者が求めるような品目に適したクワ材が御蔵島から入手できる見込みは薄い状況であり、上記の購入が最後となる可能性も十分に考えられる。

3. 販売 銘木小売D店は木工愛好家を主要な顧客として、1986年から江東区内で銘木材を販売している。それ以前から銘木の卸売事業をしていたが、鉄道の駅近くに立地していたことから、その立地を活かして業種の幅を広げた格好である。御蔵島産のツゲ材とクワ材は多くの品目に混じって古くから取り扱いしてきた品目である。しかし、以前は御蔵島の伐採者個人から購入していたが、現在は産業センターから購入するように変化している。

ツゲ材に関しては、年間600~700kg程度を購入している。ただし、D店では購入した材のシミなどの欠点を取り除いた上で木工に適した大きさに製材して販売している。そのため、商品として販売できる歩留まりは購入量の精々50%程度となっている。商品は直径5cmから20cmまでと多様な需要に合わせて取り揃えている。できれば直径20cm以上の材も揃えたいところだが、入手が難しい状況である。

ツゲ材の購入者は繰り返し購入する固定客が3割、新規客が7割といった見当である。前者は木札、根付け、箸、将棋駒、楽器(バイオリンのあご当て部分、木管楽器の胴体)などの製作を目的に購入している。一方、後者については様々な樹種と取り合わせて購入しているため、何か特定の用途に向けているとは言い難い。固定客は14.5人であり、多い人で年間8~10kgを購入している。

ツゲ材に品質が似ていることから代替材もしくは競合材として店頭と並べているのは、トルコツゲ、パロプランコ(カステロツゲ)などである。トルコツゲは国内産のツゲより若干安い程度だが、カステロツゲは国内産ツゲの3分の1程度の値段である。かつて国内産ツゲの代替品として広く普及したシャムツゲは近年の伐採量減少から簡単に入手できない材へと変化している。

一方、御蔵島産のクワ材は価格が高騰してきたことから、5年前より取り扱わなくなっている。15年ほど前までは600円/kg程度だった価格が継続的に上昇し、5

年前には1,200円/kgとなった。その段階で小売商品としては価格が高すぎて販売しづらいと判断して、仕入れを止めるに至った。かつては指物の箱や箸などを作る人が購入していた。

IV まとめと考察

御蔵島産のツゲ・クワ材の関係者に対する聞き取り調査から、以下の点が明らかになった。すなわち、生産流通に関しては、近年における島内でのツゲ材生産量が年間5~6トンと推計されること、そのうち村行政が流通加工に関与するものが3~4トン、伐採者個人によって島外へ販売されるものが2トンと推計されることである。加工販売に関しては、2015年度において天童市での将棋駒製作向けの需要が急増したこと、クワ材の生産量が極小状態にあるために、加工者および販売者ともに今後の継続的な利用は非常に難しいと考えていることである。

以前に比べると生産量が大きく減少したとはいえ、しばらくは継続的な生産の見込みがあるツゲ材と比較して、クワ材の生産条件は今後とも厳しい状況が続き、より希少性が高まるものと予想される。しかし、ツゲ材に関しても中長期的な観点からみれば、決して楽観できる状況とはいえない。なぜなら、ツゲの現在の主な産地である黒崎地区内植林地での伐採も将来的には枯渇していずれ終わりを迎えることが確実なためである。2004年度から「平成ツゲの森」育成として植樹活動を村が展開しているとはいえ、その材が利用可能になるにはまだ相当の時間を要する(2)。したがって、持続的な資源活用という観点に基づくツゲ材の伐採指針も近い将来に必要となるものと考えられる。

引用文献

- (1) 小島孝夫(2007) 地域社会の変容と共同体の構築. 日本常民文化紀要. 26: 97-154
- (2) 御蔵島村・御蔵島小中学校・巨樹の会(2004)平成16年度御蔵島の台風災害の森再生事業報告書. 御蔵島村, 東京: 10pp
- (3) 御蔵島村役場(2016) 御蔵島村まち・ひとしごと創生長期人口ビジョン計画書. 御蔵島村, 東京: 54pp
- (4) 中村克哉(1979) 御蔵島のツゲとオオミズナギドリ. 山林. 1141: 25-36
- (5) 斉藤恵巳(1983) 東京都御蔵島村一離島の厳しさに耐え兄弟で取組むツゲ加工一. 現代林業. 199: 46-51
- (6) 東京都御蔵島村教育委員会(2006) 御蔵島島史. 御蔵島村, 東京: 1378pp
- (7) 東京都三宅支庁(2016) 三宅支庁管内概要. 三宅村, 東京: 183pp